〈論　文〉

ライフヒストリー研究における物語の位相

――「被差別の語り」をめぐって――

山　本　哲　司

はじめに

日本オーラル・ヒストリー学会のワークショップでやりとりされた講演者に対する質疑応答の内容には少し意外な感じを受けた(1)。報告者である講師は，足しげくフィールドに通いつづけ，さまざまな出会いを通じてマイノリティ・インタビューを得たことを紹介し，それらの語りからライフストーリーを成果として提示している様子を語っていた。

会場に集まった人々はオーラル・ヒストリーの研究に関心を抱く多様な学問的・職業的背景を持っている。多くの方々はさまざまな研究テーマを抱えながら，実際に各々のフィールドに足を運んでいるようであった。質問は，フィールドワークがレポートとして人々に提示されるに至るまでの基本的な問題に集中していた。幾度か奏を変えて繰り出された質問は，語りの中からレポートとして紹介する語りの引用箇所の引用基準であり，全体の会話からその部分を抜き取る切り分けの思想についてであった。当日に受けた少し意外な印象は，実際にフィールドワークを行う人々が多数ありながら，こうした基本的な点への質問に一定の回答を求める場の状況に対するものだった。みなオーラルに表明されるライフヒストリーの魅力に惹きつけられているのだが，ある人は自分が惹きつけられるものが何なのかを示す言葉を探しあぐね，またある人は自らの学問的営為の中で，それをどう位置づけるのかにとまどっているようだった。講師は，聞き手が感じる語りの面白さだと便宜的に答えていたが，会場ではさらにその面白さの背景について突き詰めた質問が向けられていた。わたしたちは，語りの面白さとしてライフヒストリーの何に魅了されているのだろうか。わたしたちは，豊饒な個々の人々のライフの語りの中から何を切り取り，提示するのだろうか。

1　オーラル・ヒストリーの構成性(2)

オーラル・ヒストリーの特徴は，2重の構成性にあることは現在ではよく知られるようになった(3)。最近ではインセンティヴなインタビューの詳細なトランスクリプトによって，語り手ー聞き手のコミュニケーションの様態や語られた内容の構成的な特徴について分析が進められている。これらの構成性は，エスノメソドロジー的手法でインタビューの構成性を緻密に解き明かす以前から，研究者自身が自覚し指摘してきた側面である。社会学においてオーラルなライフヒストリーを注目させることになった中野卓による『口述の生活史』においても，語り手と聞き手の共同作業の成果物としてライフヒストリーが提供されると述べられている(4)。オーラル・ヒストリーは，語り手があらかじめ客観的に持つあるストーリーを一方的に語るのではない。聞き手のさまざまなインタビュー的な技法や態度によってその場で構成される非常にインタラクティヴな創造物という特徴がある。

一方で，もうひとつの構成性は，過去を語るという事象に関わるものである。記憶と想起のメカニズムには創造的な構成性が伴う。インタビューの現場で思い出される“過去の出来事”は，これまでのわたしの経験のストックの内にある。インタビューのやりとりにおいて語られる過去は，そうしたストックから一部を抜き取られたものと言

える。何を選び，どこからどこまでをひとつのストーリーとして語るかは，語り手が判断するしかない。その意味で過去を語ることは創造的な活動であり，語られた過去は構成的な創造物ということができる。

桜井厚はこうした創造的な過去のストーリーのあり方に注目し，オーラル・ヒストリーはいくつかの重奏するストーリー性によって構成されていると指摘している。それらのストーリーは「ドミナント・ストーリー（マスター・ナラティヴ）」「モデル・ストーリー」「パーソナル・ストーリー」と名付けられる。おそらく桜井のフィールドワークの実践において，このなかでもっとも重要な位置を占めるのはモデル・ストーリーの存在である。モデル・ストーリーは，あるコミュニティ内に流通し，それを述べれば何かを象徴するかのように了解されてしまうものである。また，他方で，それを語ればコミュニティ内のメンバーとして周囲に認識され，理解されるというものでもある。ある意味とその了解を伝える情報のやりとりであると同時に，メンバーであることを示す証明書のような役割を果たす。また，コミュニティの状況や人々のアイデンティティ・社会的環境を理解するにあたり，その補助線となるのが，モデル・ストーリーに対するドミナント・ストーリー（支配的文化）である。ドミナント・ストーリーとはコミュニティをとりまく社会全体のありかたや歴史についての一般的な語りのことである。コミュニティをとりまく一般的・常識的な知の語りであり，桜井は社会規範やイデオロギーを具現する語りと想定している。モデル・ストーリーとドミナント・ストーリーは，共振し引きつけ会うこともあれば，対立・葛藤・矛盾を引き起こす場合もある，という。

さらに，こうしたドミナント・ストーリーやモデル・ストーリーに組み込めない，個性的な経験から発せられたストーリーをパーソナル・ストーリーと呼ぶ。以下では，桜井の指摘するライフストーリー論を足がかりに，オーラル・ヒストリーの構成性に注目したストーリーの読み解きについて概観する。実際に筆者が経験したマイノリティ・インタビューでは，ライフストーリーの読み解きによって被差別状況の何が了解されるようになったのか考察をすすめる。ドミナント・ストーリーやモデル・ストーリーという視点は，マイノリティ・インタビューにおいて人々の状況を理解するにあたり有益な視点を提供する。同時に，以下ではその他の物語論的パースペクティヴがライフヒストリーの読み解きに如何に導入されるかについても検討したい。それらの考察の中で冒頭に述べたオーラル・ヒストリーが提示するものの意味が見えてくるだろう。

2　語ることと聞くこと

まず最初に，被差別部落での女性たちへのライフヒストリー・インタビューでの出来事からはじめよう(5)。

大正生まれの女性はインタビューがはじまってしばらくすると，ほっとしたようにこの場に来たことの胸の内を述べた。「今日は何を聞かれるのやと思うてきたのやけど」。インタビューの申し出があってから，当日が迫ってくるとふた晩もろくに眠れなかったという。いろいろ心配があったのだが，インタビューが進むにつれて，杞憂に終わったとわたしたちに告げてきたのだった。

女性は，地域外から嫁いで来られた方だという情報はあったので，聞き手は結婚後のこのむらの普段の生活の様子を聞かせてほしいと依頼していた。何も特別な用意も必要なく，今までの体験を語っていただきたいと説明していたのだが，実際にはじまってみるまでは不安はおさまらなかったのだろう。大正生まれの女性は，聞き手が問い始めると，堰を切ったかのように自らの生い立ちについて幼少の頃から話し始めた。インタビューの途中，何度も自分の話がレコーダーに録音されていることを確認しながら。

ライフヒストリーの調査活動では，何度も調査目的や主旨の説明を求められることがある。インタビューがはじまる前の確認よりも，むしろ実際にインタビューが開始され少しうち解けてから率直に述べられることが多い。また2度目や3度目にお会いする方でも，再度，主旨の確認が行われるときがある。こちらの説明が行き届かなかった

ことも考えられるし，プライヴァシー情報に関する懸念ももちろんあることだろう。しかし，一方でこれは調査活動としてのライフヒストリー・インタビューの特色であるかもしれない。語り手は，日常の生活を語ってくださいと請われるたびに，それに何の意味があるのか訝しがるのである。とりわけ被差別部落を訪れて，差別問題について質問を向けるのでなく，普段の日常生活を伺おうとする場合は，調査にどのような主旨があるのか疑問に思うのも当然に思える。ときには被差別部落でのインタビューにおいて差別の“さ”の字も出てこない場合もある。語り手が差別や部落という言葉を回避して語ろうとしている場合もあるからである。しかし，そればかりでなく，聞き手の方も差別にこだわらずにライフ全般にわたって聞いている側面もある。ドミナント・ストーリーとしての差別問題への一般的な見解や，モデル・ストーリーとしての標準化・共通化された差別問題への見方ばかりを聞き取るのでなく，まず個性的でユニークな個々人の体験を聞こうと耳を傾ける場合である。差別の問題や被差別の体験は，むしろ日常生活の微細な局面で問題として現れることがあるからである。モデル・ストーリーとして被差別部落に共有される被差別の語り口すら，定式化され画一化された見方になれば，個々人の微細な日常生活の問題を見過ごしてしまう場合がある。

また，インタビューの録音に聞き手の関心が向かうこともよく起こる現象である。試験的に体験してもらえれば理解できることだが，自らの話を他者に録音されることはあまり心地のよいものではない。個人的な体験ばかりでなく，これまでの人生ですれ違った人々の話までが記録されるのだと考えると，録音に対して気がねをする場合もある。しかし，今回の大正生まれの女性の録音へのこだわりの場合は，インタビュー活動の全てを概観した場合に，ある意味が読みとれた。

3　メッセージの伝承とモデル・ストーリー

大正10（1920）年に父の里で生まれた女性は，両親ともに被差別部落の出身者ではない。小学校を卒業するまでに相次ぐ両親の死に出会った彼女は，嫁いでこの地に訪れるまでにさまざまな苦労があったと堰を切ったように語りだした。元軍人だった父が亡くなったとき，「天から地ぃへ落ちた感じ」がしたという。両親が亡くなり，13歳から京都で女中奉公をはじめた。「やっぱし親も誰もいやへん，みなし児をね，そうら誰が信用してくれはります。それがもう，あんた，泣きましたな。やっぱ昔のこと思て」。両親が亡くなると，それまでの人間関係も崩れていった。兄弟もみな「ちりぢりばらばら」である。女中奉公をいくつか繰り返し，一人前に成長した頃に，人のつきあいの中であらぬ噂をたてられたこともあった。「あのね，自分の冗談言いますけどね，人様のことは，わたし言いません。なんでやちゅうたら，わたしがどうもないのに，噂たてられたでしょ」。その経験から，他人について憶測で話をすることは避けるように自分を戒めるようになった。両親の言葉も思い出される。「わたしのお父さんお母さんはね，吐いた唾は飲み込めんって，生前。いったんいらんことを口に出していうとね。ま，そのね，吐いた唾は飲み込めしませんでしょ」。

結婚で，地方の部落に嫁いでからも苦労は続いた。女性は農業というものを経験したこともなかった。「じゃがいもやら空豆やら，食べて食べて，あの，目が回りましたわ。ほんまに，田植えやとか草取りせんならんで。あの，今，お薬ばっとやったらええけど。なんぼ，そうでも，もう仕方がない。仕方がないって思って。歯，食いしばりましたがな。ここで飛び出したら，やっぱし笑われますし」。実は，女性は被差別部落とは知らずに嫁いできていた。相手が農家だと知った兄弟が，食料事情のままならない終戦直後の時代に結婚を勧めたらしい。「（部落と）知って，（嫁に）やったらしい。わたしが知らんかっただけで」。嫁ぎ先のむらが部落だと知ったのは，結婚して2・3ヶ月も経た頃だった。

子どもたちにはここが被差別部落であることを「ちいさいときから教育し」伝えてきた。「家のなかでは通っても，あの，わけわからんこと言うて。外で通らへんのさかいって，そんな教育つけ

てきました。あきまへんやろか？」

社会の差別へ抵抗する戦略として，「後ろ指をさされない人間になる」，さらに立派になって社会を見返すというストーリーは被差別部落のインタビューにおいて頻繁に登場する。立派になるという表現は，もっと単純に経済的な力を得ることを指している場合もあった。ここで，ストーリーの多様性を考えるために，被差別部落に生まれ育った昭和19（1944）年生まれの女性のストーリーをとりあげてみよう。彼女は，「金を持ったら，一般の人との結婚もできる」と祖父母から教えられていたという。一般の人とは部落出身者ではない人のことである。今，現在，昭和19年生まれの女性は，そうした考えに懐疑的である。「ウチは間違った考えを，わたしにものすぐ入れてきはったんや」。祖父母の時代は，生活の貧しさが苦しかった。部落の差別のしんどさもあるけれども，貧しさゆえの苦しさの方が勝っていたともいえる。「もう，差別のそんなんは見抜けへんだて言うか。ただ仕事をして生活をせんならんに追われて，そればっかりだったんで」。“差別のそんなん”とは，差別意識や差別問題が経済格差だけの問題だけではないということを指している。経済的に豊かになり，暮らしは立派になっても，人々の差別意識や偏見が払拭されるのはなかなか難しい。いずれにしても，昭和19年生まれの女性は，祖父母の教えをその当時の生活条件や環境の枠組みの中から得られた視点として理解している。「仕事せなあかんというおじいさんおばあさんの考えやから，だからそれは言葉にも出てきてましたんです。やっぱり今で，あの，おかしいことやけど，“エッタも持ったや”と言い方されたんですよ。……お金をもてということ言うてはんな。エッタでもお金持ったらいいんやっていう。いま思うと間違えなんやけども，そういう，うん，わたしの親もそうでしたわ。……どこどこのまあ，部落の名前あげてね，あこの誰々見てみいと。金持ってるさかいに一般の人の女の子を嫁さんにもろうたとかね。それは金の力でもらえたんやみたいに」。

これまで見てきたように，差別に抵抗するために「立派になる」というストーリーには二つのバージョンが頻出する。ひとつは，「後ろ指をさされない」人間に，どこに出ても通用する立ち居振る舞いを身につけた，自らに誇りを持った人間になることである。もうひとつは経済的格差という現実を前に，それを克服し，具体的な経済的・社会的な力を獲得するというストーリーである。前者は，一般的な社会理念においても支持されやすい価値であるので，個々人が語るのみでなく，家族や地域で伝承され継承されるコミュニティのモデル・ストーリーとして語られやすい傾向がある。実際に，被差別部落では人々をとりまく差別的状況の影響によって自己卑下に向かってしまう社会的性格形成の問題もあり，誇りを獲得するというストーリーは自尊感情を育むためにも強調されやすい。しかし，このストーリーが地域コミュニティ内でモデル・ストーリーとして現実に強調され共有化されていった場合でも，被差別状況の現実をただなかを生きる若者たちは，あらためて自己否定の矛盾にさいなまれる場合もあることはかつて拙論の中で指摘している(6)。

また一方で，後者の金銭的な豊かさのストーリーは，地域のモデル・ストーリーとしては共有されにくいが，生活の実態をふりかえり，多くの方が述べるものである。昭和19年生まれの女性も述べているように，このストーリーは家族コミュニティ内で伝承されるモデル・ストーリーとなっている場合がある。後者は「貧しさ」から抜け出すことで差別からの解放を述べるものだが，一方で「差別なんかは関係ない」という，差別とは無縁であるという発想も語られやすい。いずれにしても，それぞれには「差別に負けない」「誇りを奪われない」「誇りをとりもどす」というメッセージが込められている。

4　語りの外にあるもの

ところで，先の大正10年生まれの女性のライフヒストリーの語りには，語り口によって彼女の生きる現実状況の理解が可能となる場面があった。それは，結婚した娘たちの話題に関するものだった。生活に追われながら娘たちの成長を見守る話は，やがて結婚の話へと進んだ。結婚に関す

る若い男女のやりとりや親の心配は，今でも部落差別問題の大きな課題である。しかし，女性によると娘たちの結婚は，心配することもなく存外にスムーズに進んだという。けれども，結婚から後の娘たちとのつきあいの話になると，なぜか話が別の話題に切り替わるのだった。インタビューがはじまっておよそ10分後，30分後に同じように話の流れは嫁ぎ先の話題に向かおうとしていたのだが，次第に方向転換されていった。しかし，2時間近くのインタビューの終盤になって，唐突に女性の方から娘と孫について語られることで以前に行なわれた方向転換の理由が理解できるようになった。

娘たちはみな嫁いでむらを出て，今の楽しみは孫と会うだけであるという話題に続けての話である。大正生まれの女性は話題を次のように切り替えた。「ほんでもね，姉ちゃんはね。やっぱし，長女だけっていうのかなんかしらんけども，やっぱし同じ仲間でしょ。やっぱりよろしな。やっぱりハタの子（＝他の娘）は，みなもう，あとのは一般地区行ってはるでな。そして，そして，わたしもどすわ。やっぱし，あのう，行くのかなわんね。やっぱり，〇〇行きやすいね。もう，自分のひがみかもしりませんけどね，行きやすいね。そしてやっぱし，あの，なんどすわ。妹さんもね，仲良うしてくれる，ウチの娘と。……そいでね，やっぱし，こちらもそんなひがみかもしらんけど，やっぱし，もう行くときは，気ぃやすまります。みなが，あのう，親切な。」

上記の語りによれば，どうやら長女は被差別部落に嫁ぎ，他の娘は一般地区に嫁いでいるようであった。女性は，同じ被差別部落の長女の嫁ぎ先に「行きやす」さを感じているという。

ライフヒストリーのインタビューは，語り手にとっては人生の出来事をふりかえり，思いをはせる作業である。それは同時に自己を見つめ直すことでもあり，語りの流れのなかで，それまで誰にも話せなかったこと，語りにくいことに突き当たることがある。大正生まれの女性の語りには二つの意味での語りにくさがあるように思う。ひとつは「なんとなく」肌で感じていることを聞き手に伝えようとすることの語りにくさである。こんなことを話して聞き手にわかってもらえるだろうかという懸念がある。この懸念だけをとりあげるならば，語りにくさは被差別部落の問題に限らない。たとえば，年輩者が若者に対して人生をふりかえるとき，「若い者には言ってもわかってもらえないだろうが……」という思いとともにはじまる経験を他者に伝える困難の問題が人生の語りにはある。しかし，ここでは，差別－被差別の関係性のなかで「なんとなく」肌で感じている微妙な自己自身の感覚を述べようとしている。懸念はより深く重いものになる。

さらに，語りにくさのもうひとつの理由は，そのように感じている自分の方が間違っているかもしれないという思いにある。こちらの問題は，差別－被差別の状況では特に頻出するストーリーである。被差別体験を語るとき，直接的に自分に向けられた差別発言や差別的態度をあげることは意外に少ない。むしろ若い世代になればなるほど，祖父母の時代は厳しかった，昔はひどいものが多かったという伝聞による被差別経験を知らせてくれることが多い。では，まったく自分自身の被差別体験がないということなのかと問えば，そうとも言い切れない。人々は子ども時代，青春時代に「なんとなく」感じる違和感のようなものとして被差別経験を語ることが多い。それは「ウチのむらが他のむらと違う」と意識しはじめ，他のむらと扱われ方が違うという感じ方である場合もある。また，子ども時代に，近所のむらの友だちの家に遊びに行ったら，その家の大人にもうここへ遊びに来てはいけないとはっきりとした理由もわからないままに言われた経験などとして記憶にある。「なんとなく」感じることは「わたしが間違っている」かもしれないけれども，被差別経験をそれと察知するはじまりなのである。そうではあるが，同時に人々は，そのように感じている自分の方が間違っているかもしれないと逡巡している。「なんとなく」感じた例を，ここで再び昭和19年生まれの女性からうかがってみよう。

5　経験からモデル・ストーリーへ

昭和19年生まれの女性は，小学生のときに，

先生や同級生から差別的な態度を「なんとなく感じ」たことがある。学校での運動会や文化祭で，自分のむらの子どもに対する先生の態度が「おかしい」と感じるものだったという。やがて，解放運動に積極的に参加し，差別問題について学び始めた女性は，小学校の同窓会で子どもの頃に感じたわだかまりを，先生にぶつけてみたという。「先生，差別してたねぇって。わたしは，そらもう（解放）運動してからやからなんでも言えるから。ものが確実にわかってきてるからやからね。ものすご，わたしら（のむらを）差別してたね。……ざぁーっと，ウチの地区の人ばっかりばぁーっと集めてね，パンパンパンパン，しばかれたり立たされたりしてましたんや。」

当時は，子どもから学校の様子を聞いた親の代表が，むらの子どもばかりになぜそのような態度をとるのか，問いただしにくることもあった。「先生，そう言うてはった。差別と違う。それはお前たちをちゃんとしようと思ってしたと言わはった。それがほんまなのかどうか知らんけども，わたしらは見えてるもん。まわりからそんなん，なにも余所の地域の子，違うもん。わたしらの地域ばっかりが怒られたり，立たされたりなったからね」。

このように感じてきた女性は，中学生になると，身元を隠そうという意識が強くなってきたという。同級生たちとの次のようなやりとりも影響していた。「うちの地域の何人かいっしょに学校自転車で行きますやん。（通学途中で会った同級生が）あんたも○○か？っていうかっこうで，あんたは○○には見えへんなぁって言われたことありますよ。今，思うと腹立たしいけども，わたし部落に見られてへんのやなぁ。同じここの地域の人といっしょにいて，あの人はそう思うけど，あんたはそう見えてへんなとかね。はっきり言われました。ただ，（そう言われて）喜んでたんや。いま思うと歯がゆいけどもよ。」

「いま思うと歯がゆい」のは，現時点で語っている女性からは当時の同級生の発言が差別的なまなざしによるものだと認識できるからである。中学生の自分はそれがわからずにあまつさえ同じむらの子どもとは違うように見られていると喜んでいたことに対する忸怩たる思いがある。いずれにせよ，被差別体験のストーリーには，「なんとなく」感じていたという語りが頻出する。年を重ね，社会を知るようになって，自身の人生をふりかえるようになって生まれる認識である。周知のように，差別は差別者側の主体的な意志や意識によってのみ発生するものではない。むしろ，常識的な知や感覚の中に差別的なものが入りこんでいる場合があり，日常生活ではそれが問題となる場合が多い。おそらく会話中に出てくる中学の同級生も悪気があって述べているのではないだろう。悪気がないと推測できるのは，その言葉を投げかけられた本人も当時，差別的だと感じていない点においても判断される。悪意のある言葉の投げかけは，複雑に悪意を包み隠した嫌みでさえも，相手や周りに伝わりやすいものだからだ。発言者の同級生に悪意があるかどうかはともかく，言語の用法自体は，日常的に利用される○○という固有名詞や部落という抽象的な名詞にまつわるカテゴライズされたマイナスイメージを操ったものである。○○という部落イメージに，昭和19年生まれの女性は似つかわしくないと述べたのだが，○○に暮らす人々にとっては，そもそも前提となっているマイナスのイメージがなんのためらいもなく使われることが問題である。こうした言葉の背景にあるアンバランスな現実理解の状況についての指摘は，平等や権利についての学習もなく，社会状況に対する情報と理解も少ない若い世代には困難である。

その一方で，差別に抵抗し，反対する解放運動の中では，このような「なんとなく」感じる経験を束ね，「差別を見抜く目」を養うという教育的課題が生まれてきている。「差別を見抜く目」が養われるようになり，過去の経験は「いま思うと歯がゆい」ものへと理解される。こうして「差別を見抜く目」を養うことは，差別に抗するコミュニティ内のモデル・ストーリーとなっていく。むしろ現時点の被差別の部落の環境では，運動団体の影響が強いほど，「差別を見抜く目」を養うモデル・ストーリーは，コミュニティ内においてはドミナントな傾向が強まってきているともいえ

る。その一方，近年では，「差別を見抜く目」という差別に抗するモデル・ストーリーが強調・共有され常態化してくことにたいして，特にユニークなパーソナル・ストーリーを持つ若者世代を中心に異論が出始めてもいる。彼らは「なんとなく」差別を感じるということも起こったことがないと述べる世代である。そこでは，差別を見抜く目を持つことを意識した人たちが「なんとなく」感じてきていたことを認識しても，むしろ差別とみなさないという感性さえ現れはじめている。無論，現在でも，社会に敏感に差別性を察知し，逡巡し，悩み，抗う若い世代は多い。また，差別とは無縁と言いながら，社会的地位の上昇を図る若者もいる。現在の状況では，どちらかと言えば，立派になることを求める鼓舞や激励のストーリーにも距離を置きつつ，差別を通り過ぎてしまうかに見える「みなさない」派は，「差別を見抜く目」を養うことがドミナントな傾向をもつコミュニティでは，むしろ少数派である。「みなさない」派は将来的にも差別を予感せず，むしろ，なぜみなが強硬に差別に拘った議論をするのかわからないという感性を持っている。あるいは，差別に抗する語りに出会ったときに，自分はどうしていいのかわからないと感じている。差別にあったという経験を実感したことがないからである。いずれにしてもこれらの多様な感じ方は，既存のモデル・ストーリーの崩壊とコミュニティの危機としてとらえるのではなく，多様なパーソナル・ヒストリーから新たなモデルが生まれでる過渡期を予感するものと考えられる。

経済的格差などが明確な時代ではモデル・ストーリーとして立派になるという“激励と鼓舞”のストーリーが非常に印象的であった。これは現在の若者にも広く抱かれているモデル・ストーリーである可能性はある。また一方で，戦後の民主化を迎え，差別に抗する意識や活動の高まりとともに“差別を見抜く目”というモデル・ストーリーが反差別のコミュニティから急激に広まっている。時代状況の変遷の中で，コミュニティのありようも変動し，個々の人々の経験から生まれるモデル・ストーリーも変化してゆくのである。

6 ライフヒストリー・インタビューのダイナミクス

ところで，先に紹介している大正生まれの女性の「なんとなく」感じている娘の嫁ぎ先への行き来のしやすさの話題は，語りにくさそのものが直面している現実のありようをわたしたちに物語っているように思われる。この話がいかに語りにくいものであったのかは，発話内容そのものを見るよりも，インタビュー全体を通じて語り全体の構成を概観した場合に痛感させられる。最初に紹介したインタビュー冒頭の録音への忌避感や懸念まで，この話の語りにくさと関わりがあると解釈するのはいささか強引すぎるかもしれない。しかし，インタビュー中に2度の話題の回避があったことは明確であり，終了にさしかかって語りはじめられたことには，話題になんらかの意味が込められている。インタビュー全般を通じての語りにくさというあり方自体が，大正生まれのおばあさんが直面してきた現実のありようを，わたしたちに問いかけるようである。「わたし，こんなに心ひらいて話したのは，はじめてや」。

こうしたインタビューで生成する意味は，発話内容そのものをストーリーとして把握する概念では明確化しにくい。インタビューをめぐってのやりとりであり，発話内容ではなく，インタビューの環境条件の中に潜む問題である。しかし，インタビューそのものをめぐる語り手ー聞き手の相互作用の発露としてその意味をとらえることもまた困難である。ここに見られるのはインタビューの物語構成のあり方によって浮かび上がってくるコンテクストの問題である。インタビューの流れの構成によって，わたしたちは女性の語った話題の語りがたさを明確に意識するようになっていたのである。

また，こうした認識をより確実に考察に落とし込む条件として，トランスクリプションの作成作業はより重要な意味を帯びるようになる。トランスクリプションは字義通りに読み込まれるものではなく，文字におこされた発話内容の全体を見渡したなかでの意味の把握という役割を担うものでもある。そこには言葉になっていない語られない

ものが反映されているのであり，また，そうした読み解きによって語られた言葉の意味内容の同定も基盤を成せるようになる。このように考えるとこの問題は一度限りのインタビューのトランスクリプションでの話題に限るものではないことがわかる。2度目，3度目と繰り返されるインタビューで起こる語り手の変化，当初の出会いから語りが生み出されたその前後のやりとりという物語が産出されたライフヒストリーの意味内容の同定に関して意義を持つのである。

7　人生の転機のストーリー

ライフヒストリーの研究において，人生の転機は非常に興味深い研究課題である。デンジンはこの転機を「エピファニー」という用語で示し，ライフヒストリー解釈のための重要な基軸として議論した。「エピファニー」は転機となった出来事での「劇的な感知」として紹介されている。実際のライフヒストリーのインタビューでは，強烈な感情経験まで伴わないまでも，語り手自身，人生を振り返る中で様々な転機のあり方が登場する。

被差別部落のインタビューにおいてもっとも興味深い人生の転機のひとつは，本稿においてこれまでに紹介した話題のなかにある。「なんとなく」感じられていた差別をどのように差別と認識するようになったのか。なにをきっかけに変わっていくのか。どのように認識するわたしになっていくのかである。ここで，先述した昭和19年生まれの女性のライフヒストリーを再び振り返り，学んでみよう。

昭和19年生まれの女性が，差別の問題を考えるようになったのは，差別問題の学習会に参加するようになったことが直接的なはじまりである。しかし，解放運動に真剣に取り組むようになったのは，勉強会に参加しながら子どもの成長を考えるようになった頃だという。「やっぱり，自分たちの過去を振り返ったときには，やっぱり故郷が言えない。そういう部分やら，差別されたしんどいこと，やっぱり子どもにはさしてはならんっていうこと。（差別問題や解放学習の）勉強の中で，ものすごく感じてきましたんや。この子らが大きいなって結婚のときに，やっぱり親で対処していきたい。そのために運動してるんやっていう意味があって，頑張ってきたん」。

女性は，こうして地域にある解放同盟支部の婦人部での活動に積極的に参加しはじめた。しかし，妻がそのように積極的学習し活動する一方，同じむらの生まれの夫は妻の行動に懐疑的だったという。そんな夫の心中を女性は次のように推し量っていた。「お前らが，寝んと（解放運動）しても差別は消えへんみたいに思ってはるさかいに。差別はあるの知ってはるし。そんだけしんどいいうことは知ってはる。けど，なんぼ頑張っても消えへんという意識が，（夫には）ガンとあったから」。

そんな夫の態度が変わったのは，子どもが通う学校から，先生の訪宅がはじまったときだった。その頃から「すごく変わった」夫は，支部の活動にも共に参加するようになった。やがて夫婦共々，支部活動の役員を引き受けるようになり，地域の解放運動の中心的な役割を担うようになっていった。その当時の二人の様子は，むしろ，子どものことを考えるように注意が促されるほどだった。「上の子が中学入った3年，高校入試になるときもしょっちゅう（解放運動に）出てましたんや。もう，2日に1回か3日に1回ぐらい，毎日，会館へ。二人ともが。ほったら，○○先生に怒られてなあ。上の子が中3の入試のとき，どっちかが家にいたってください言うて」。

子どものことを考えて部落差別の問題を考え積極的に取り組むようになるという話題は母となった女性たちに頻繁に見られる転機のストーリーである。子育ては，差別－被差別の関係性において，子育てにおいて何を伝えるか，どのような事態が起こりえて，どのように対処していくべきか。これらは差別－被差別の現実を前に，両親たちが抱くもっとも重要な教育上の不安であり，悩みである。女性たちは，そうした思いから参加した学習会をきっかけに差別・人権問題に取り組みはじめることが多い。また，こうした取り組みへの参加は，次に紹介する女性たちのように，自己自身に大きな変化をもたらすようになることもある。いずれの女性の語りも，積極的に自己を表明

する姿勢へ変化してきた様子がうかがえる。

昭和22（1947）年生まれの女性は，解放運動のあり方自体に批判的な気持ちを抱いていた。女性は部落出身者ではない。子どもたちのことを考えはじめたことをきっかけに差別問題に向き合うようになり，解放運動への見方が変わってきたという。結婚に反対する親の気持ちを押し切ってまで部落に嫁いできたその女性は，結婚後の解放運動や夫に批判的だった自分の気持ちを次のように述べる。「親を捨てて……捨てるていう言い方したくないけどね，家出るでしょ。そしたらね，やっぱりね，こんな思いまでして来てあげてるのにみたいな」。夫に対してそのような気持ちになってしまう他方で自分自身に対する自損感情に悩む自分もいた。「なんていうかな。卑屈になるわたし自身」を感じていた。「（嫁ぎ先では）みんなよくしてくれはるんやけど，やっぱりすごい気ぃ使うというか，肩身が狭いなぁという思いがあって，すごく心が揺れ動いていた」。

そんな女性が変わったのは，婦人部で開かれた講演に立ち寄ったのがきっかけだった。講演会の講師に招かれた部落出身の女性は，結婚し子育てをするなかでの自分の気持ちの揺れについて語っていた。昭和22年生まれの女性にとって，講演で特に印象に残ったのは子育ての話だった。子どもが保育所に通い出す頃，講師の女性は子育てについて悩みはじめた。小さな子どもとの遊び方など，どのように接していいのかわからなかった。毎日の生活に追われるばかりで，振り返ると子どもを叱りつけてばかりいたように思う。そんなふうに育った子どもは，いつのまにか全然笑わない子どもになっていた。どうして自分はそのように子どもにあたってしまうのだろうか。そのように自問すると，講師の女性は自身の両親のことが思い出された。「それはなんでかっていうのを考えたら，やっぱり○○さん（＝講師）のお母さんが，差別によってそういう教育も奪われてきたし，もちろん仕事とかも奪われてきたし，親子の関わりっていうそのもんがなかったっていうあたりがあって。で，そこで，自分で気ぃついたんやって。うん。あの，それから変わったっていう話を聞いて，すごくわたしは，その話が心に響いて。もう具体的には忘れたんですけども，ものすご印象深かったんです」。その話を聞いた後，自分自身は「ガラっと変わった」ように感じている。「なんかやっぱり自分のなかにも」存在する部落へのこだわりやわだかまりに気付くようになっていったという。

「ガラっと自分が変わる」という話題は，人生の転機を語る場合によく見られるストーリーである。すでに紹介した二人は，被差別部落での解放運動や差別問題への取り組みに対して，積極的な態度に変化した。その転機を子どもへの思いにひきつけて語られる場合，両親が部落出身者であるかそうでないかによってある傾向の違いが見られる。両親が部落出身者である場合，「自分と同じような目に遭わせていけない」という言葉に集約されるように，子どもに親自身を重ね合わせるかのように思いが語られることが多い。一方，部落出身でない女性が語る変化の有り方は，よりドラスティックに表現されることが特徴である。そこでは部落と自分を認識する内面的な自己自身への突きつめと，自己の変革が語られることが多い。

昭和25（1950）年生まれの女性も，子どもをきっかけとした差別・人権問題への向き合い方の転機を語っている。昭和25年生まれの女性も親の反対を押し切って，部落外から嫁いで来ていた。結婚するときの自分は，嫁ぎ先が部落であろうと二人の結婚には関係がないとさえ思っていた。しかし，その後自分自身の内部にあるわだかまりを感じるようになった。「なんていうかな，こうね。世間の人と接したりするなかで，じわじわじわとね，なんとなくこう，1回2回じゃなくて，数年の間にこう，なんとなくね，感じてくるんですね。なんかこう，差別意識いうかね。ここはそうなんやぁみたいな。そうなんやぁだけじゃなくて，なんかこう，なんか知らないですけど，こう，空気でね，人の話しぶりとかそういう空気でね，なんかこう，あるんですよね。なんか，じわじわとしたもんが。……で，もう，ほんとにこう，陰気な，陰気な気分で，数年過ごしました」。

そんな陰鬱な気分から脱するきっかけはやはり子どもの将来を思ってのことだという。

「で，なんていうの，やっぱり，この子はね，ここに生まれた子になる。で，なんていうの，子どものためにね，どういう，これ，今後，将来ね，どんな思いでね，この子は過ごすんやろうと思ったらね。自分自身が暗い気持ちやから，やっぱ子どもにまでね，そういうね，なんかもう，わたしは途中だから，ほんで結婚したしね，わたしの人生はまぁいいとしても，子どもは，これからね，こういう重圧をね，に，耐えて生きていかな，なんか重い石をね，背負ってね，生きていかな。なぁんかね，なんかかわいそうやなっていう，常にそういうに思ってました。長い間。で，そういう気持ちをね，もう自分で消そう消そうと思うてもね，なかなか消えるもんじゃないですね。で，そういうのがずっと。気分的ね」。

子どものこれからを思うには，様々な感じ方がある。昭和25年生まれの女性が語ったのは，子どもがどのような思いでいるか，という気持ちを推し量る心況だった。この心況は，部落外から嫁いできた部落出身でない女性がときおり吐露するものである。今回紹介している昭和生まれの女性ばかりでなく，大正生まれのさらに古い世代の女性たちなどにも，同様に子どもの思いを感じとるための差別問題の学習であり，解放運動であることを語った人たちがいる。このように語る人たちに共通しているのは，わたしは部落の生まれでなく部落外で生まれ育ったために，生まれたときから部落で育つ子どもたちの気持ちを理解しきれないかもしれないという懸念だった。解放運動や学習には母親と子どもの思いの距離を埋めるためという意義がこめられた。しかし，同時にそこには子どものことをかわいそうと思ってしまう自分がある。その部落へのこだわりに対し，昭和25年生まれの女性は，さらに自分が変わっていくことが必要だと考えている。「だから自分がもう強く強くならないと子どもを守れないし……だからわたしがもっともっと変わることによってね，子どもも，やっぱりね，ね。……だから部落やとかどやとかそういうのは，もう，なんていうか，わたしのなかではね，あの，ちょっと置いてるんです。……自分が変わることによって周りも変わるみたいなね。そら，周りがようしてくれるからいうのを待つんじゃなくてね，自分が変わることによって，周りが変わると思てるから」。差別からの解放の学習や，差別を考える学習は，まず自分自身のための学習である。自分自身の内にあるものを見つめることから自分自身は変わっていけると女性は語っている。「だから，自分自身をいっぺん壊して，壊してしまって，まあ卵でいうたら殻を壊して，中身，生身のほんとの生身をさらけだして，それから，なんていうのかな，同和教育やったら，同和教育，その，ほんとのね，生き方いうか，ほんとの人間になるためのね，なんかそういうふうに，いまとらえているんです。」

8　自己と差別と解放
－出会いと変革のストーリー

これまでに紹介した“差別・人権問題へ向き合うわたしへの変化”という被差別部落の女性たちのストーリーは，子どもたちへの不安を転機として語られていた。それぞれの思いの深さが伝わるように思われる。ここで，視点を変え，被差別部落の差別－被差別の状況における自分自身への理解という観点から変化のストーリーをとらえてみる。すると，それは，解放運動や学習を通じての出会いと自己変革・解放のストーリーであることがわかる。それはコミュニティにおける，差別と自己のありようを語る一種のモデル・ストーリーとして世代に共感を得られているように思われる。

わが子への思いをきっかけに差別・人権問題の学習にとりくみはじめたストーリーの大切な点は，母であるわたしが変わることにあった。子どもを思う気持ちが転機となったストーリーは，大正生まれの方たちにも同様な経験がふりかえられた。しかし，大正生まれの女性たちの話には，自己の変革という視点は希薄だった。部落差別問題を，自己と自己自身の解放のストーリーとしてとらえる視点は，若い世代に共有されやすい発想なのかもしれない。あるいは，部落と差別を語るモデル・ストーリーとして反差別のコミュニティ内ですでに流通しつつ公式的見解になっていたので

あろうか。解放の運動の中で，“差別を見向く目を持つ”主体の形成というストーリーは，部落外からのまなざしを理解するだけでなく，自己理解の物語を生みだしていた。昭和20年代の女性たちが活躍し地域の中心になっていく1970年代から80年代の一般的な社会意識の影響もあったと思われる。こうした時代背景というドミナントな文化的傾向の潮流の，反差別のコミュニティにおけるストーリーの形成への影響などについては今後の課題としておきたい。

いずれにしても，先述した昭和20年代の女性たちと同じように次に紹介する昭和23（1948）年生まれの女性も，解放運動との出会いによって変わることのできた自分を語っている。先述の二人の女性と異なるのは，生まれ育った部落で結婚し，いまも子どもたちと暮らし続けているという点である。

「もっと早く，解放運動に出会えてたらずっと違う生き方できたなぁって」。この女性は地域のなかでも，婦人部の活動を牽引する中心的な方だった。けれども，自らをふりかえると，若い頃は人前に出るのが苦手で，どちらかといえば自己否定の感情が強い青春を送っていたという。「（授業で）本を読むのなんかでもね，立つともう，赤面症で。しゃべれないんです。なんかこう，すっごいやっぱ意識，コンプレックスっていうか。なんかそういうコンプレックスの塊みたいなね」。

成人を迎えても，コンプレックスは異性とのつきあいに強く影響していた。恋愛関係になることはあっても，「わたしよりももっとふさわしい人がいるんちがうかもしれへん，その人にとっては」という思いにかられてしまう。自分のことは常に「駄目や」と否定的になり，結婚もできないし，したくはないと感じていた。いま思えば自分の気持ちをストレートに出せず，「抑えて抑えて」生きてきたと思う。

直接，差別されたということはないけれども，ふりかえってみれば，あれが差別だったのかと思い出すことはある。学生時分に「あんたは○○（＝女性の地元）の人やけど，なんかおとなしいなぁ」と言われ，なかよしグループに入れてもらった覚えがある。友だちの言い方では，自分のむらはなんとなく余所のむらとは違う，いけない所のような言われ方をした。けれども，自分のなかのもやもやとした疑問を誰にも話すことができなかった。「母にも訊くことができなかった。……なんか訊いたらあかんようなね，なんか訊けないような，そういう雰囲気をずっと感じたんで」。

縁があって結婚し，子どもを産んだ頃に，差別や人権の問題について考えるようになってきた。子どもには，自分のような生き方はさせたくない。自分の思いをはっきり言えて，自分のやりたいことができる人になってほしいと思った。そのためには，自分自身が思いを伝えられるようにならなくてはいけない，「話すことを取り戻」すという思いが強まってきていた。

実際に，部落や差別の問題に向き合い，自ら考えるようになったのは地域で婦人部の役にあたった頃である。そのとき，同じ役員には部落外から嫁いできた同年代の女性がいた。嫁いできた女性は，自由に闊達に話せるタイプの人だった。ある日，地域の会館がなぜあるのか訊ねられた。彼女は，会館があるからかえってここが部落だと知らせているようなものだ，と感じているという。「それをどういうにね，言ったらいいのかね，わからなくて。もう悔しくってね。やっぱり悔しいんです。言えないっていうことが。だから，帰って主人に訊いたり。また，本を読んだり。それはやっぱし，いま思うとそういうほうが，自分にとったら，いろんなもんがね，変わった。自分の中でね。変わってきたね」。

人権の学習会や寄り合いのときには，人前で話すのは苦手だったが，とにかく「一言でもしゃべらな」くてはいけないと考えるようになった。会の前日には，明日の集まりで話すことをメモをとるようにもした。会の最中には，なにか話さなくてはと，ぶつぶつひとりごとを言っていることもあった。実際に話をしてみて，思った通りに話せない自分に落ち込んで帰宅することもあった。

差別に無関心だったのは，それに気付いたり関心をもつ力が奪われていたと思う。関心を持つ力をとりもどし，他者にも啓発の輪を広めていこうと考えた。地域のなかには，解放同盟支部の女性

部での活動や，保育所での同和研修のあり方を好ましくないと考えている母親もいる。部落外から嫁いできた人や，宅地開発によって転居してきた若い母親たちにはそのように考えている人が多い。「ちょっとでも多くの方に」解放教育の意義をわかってもらいたい。同和保育への参観や，人権の学習会への参加を呼びかけるようになった。「一緒にやって下さい」と呼びかけるだけではなく，その人が考えている批判的な意見や疑問にも耳を傾けるように心がけた。批判的な意見に対して，解放運動の意義や社会の状況について説明するときには，言い合いになったり涙を流すこともあった。また，本当にお互いにうち解けて笑いあうこともあった。「昔はね，わたしらも，泣かな言えなかった状況だったし，ま，自分のなかに知識もないし。それだけ人を説得する力もないし。もう，感情のままでしか言えない。向こうももう，なに言ってるのか，ほんまわからへんから……」。分かりあえたと感じたときは，それゆえ，よけいに強く絆で結ばれるような気がした。それまで，差別問題にまったく見向きもしなかった人が，差別に怒り，社会の問題を考え，差別に反対するようになっていくことにはとても感動させられた。「人って変わるんやなぁって，教えてもらったていうか」。

「同じね，差別されてるもんばっかしが，そやなぁそやなぁじゃなくって，そうじゃないね，ここはおかしいって。そういう人に出会えたときにね，なんか，あ，世の中変わるようなね。……言うてることは正しいっていうか，展望っていうかね，……なんか，すごく，それがなんか解放されるようなね，自分の中からね，なんか解放されるような，なんか……で，そういうとこやね，自分を変えて行くのは。わたしにとったら。そういう人たちがいたから，差別から解放されてね，きたんやなぁって」

出会い，自己変革，この女性にとっての部落差別からの解放とは，出会いを通じての自己変革そのものととらえられている。自己変革は，差別や人権の学習から得られる「差別を見抜く目」のストーリーに通ずるものがある。自己変革を契機に自己への欠落感は，社会の差別的状況のなかで成長するマイノリティとしてのわたしに基因するという視点が得られる。ストーリーのなかで語られる解放感のひとつの要素として，「差別を見抜く目」のストーリーと同様に自己の経験のとらえかえしがある。しかし，ここではそれ以上に強調されるのは他者との出会いのストーリーである。昭和23年生まれの女性の語りは，部落外と自他ともに認識していた人たちを共に考える人々として理解を深めることに展望を見いだしている。差別からの解放は，自己の変革によるものであり，それは他者との出会いを通じて変容するプロセスである。この語りでは「差別を見抜く目」のモデル・ストーリーよりも，出会いと他者理解と自己変容こそが差別からの解放のストーリーとして重視されている。いずれにしても，自己変容の物語自身が昭和20年代生まれ以降の方たちに頻出するという現象は，部落と差別とわたしを物語る様式が，社会の変動とともに新たに創出されていくことを示唆するものである。

おわりに

最後に，これまでに紹介した議論をふりかえり，今後の課題や展望について示唆しておきたい。オーラルなライフヒストリーの読み解きには，さまざまな視点の導入が試みられている。ここではライフストーリー論を中心に物語としての構成性という視点から，ライフヒストリーの詳細を概観してきた。オーラルなライフヒストリーの成立には，その背景にライフヒストリー・インタビューという活動が不可欠である。物語的視点は，ライフヒストリー・インタビューの内外をとらえ，ライフヒストリー内容の理解に努める。インタビュー全体のダイナミックな構成性への着目は，口述される人生の語りの意味を外的に同定する。内的には，“社会”との関わりにおいて，ドミナント，モデルなどのストーリーが利用され生み出されている様子がうかがえる。今回の報告では，マイノリティの社会における，抵抗の文化としてのモデル・ストーリーの存在を確認した。また，それぞれの個性的な人生への語りが，自己と差別社会とをとらえる自己解放のストーリーを産

みだし，あらたなモデル・ストーリーへの萌芽を紹介することができた。一方で，残念ながら検討に至っていないのは，このモデル・ストーリーがいかに公式見解としてコミュニティ内部に流通しているかを確認するための情報メディアなどの分析である。しかしながら，オーラル・ヒストリーの豊かさ・面白さが，こうしたインタビューの集積によるモデル・ストーリーの産出過程に立ち会う瞬間にあり，あるいは，それまでのモデル・ストーリーを転換していくようなユニークなパーソナルストーリーの登場との化学反応の様子にあることは指摘できたのではないかと思う。モデル・ストーリーの変化に着目するには，モデル・ストーリーを定式化された物語としてライフヒストリーから読むことに拘泥してはならない。ストーリーの詳細な内容と個々のユニークさ，つまり多様性の存在がストーリーの可変性をもたらしている。

また，本稿ではドミナント・ストーリーについての議論に触れられていない。筆者の力の不足で議論の流れのなかで紹介しきれなかったが，インタヴューにはドミナントストーリー，モデル・ストーリー，パーソナル・ストーリーが同時に重奏しつつ，しかし互いに矛盾し，干渉しあうライフヒストリーの語りもある(7)。ドミナントなストーリーに抗して，モデル・ストーリーが誕生してくる様子は，オーラル・ヒストリーがマイノリティ研究において有益な視点を与えてきたエスノグラフィー的成果である。その詳細な記述は，支配的な文化に抗して登場するユニークな主体の変容・創造の過程を物語るのである。

注

(1) 日本オーラル・ヒストリー学会　第4回ワークショップ　2008年7月　(於) 同志社大学

(2) 本論では，表現として「構築」ではなく「構成」という形容表現にするといささか違和感が伴う用語を採用している。いずれも英語表記にすれば同じ言葉で現されるが，筆者自身は「成」という漢字の持つ含意について留意しておきたいと考えている。語り手－聞き手の意志のニュアンスをこれ以降も考えていきたいので，語り手－聞き手の意志のニュアンスを伝える意味で「構築」ではなく「構成」と表現したいのである。

「構築する」という場合，主体の意志が強調されるように思われる。「構成する」と表現した場合，「成る」というニュアンスが含意される。主体同士が相互に影響しあう聞き取りの場は，語り手と聞き手に「成っていき」，聞き取りの場を「成していく」側面があると考えている。別の言い方をするならば，「構築」という言葉で表現すると作り手と成果が切り分けられた印象が拭いきれず，むしろさまざまな主体が影響しあいつつ，変化しながら混在している状況として聞き取りを考えているために「成る」の字を使用したい。

(3) 桜井厚　2002『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方』せりか書房　なお，本論に紹介する桜井氏の議論は，特に断りのない限り本書を参照している。また，オーラル・ヒストリーの構成性の問題については，「おーらりすと」養成講座の開催などで広く普及に努めている御厨貴も現代政治史の立場から同様な指摘をしている。御厨貴　2002『オーラル・ヒストリー－現代史のための口述記録』中公新書

(4) 中野卓　1977『口述の生活史－或る女の愛と呪いの日本近代』御茶ノ水書房

(5) ここでとりあげられるライフヒストリー・データは滋賀県の委託により社団法人反差別国際連帯解放研究所しが行った「同和問題意識調査事業」から引用されている。筆者は，研究所の生活史部会員としてライフヒストリーのインタビュー調査を行っている。

(6) 山本哲司　2006「部落の語り」と自己認識の課題－「激励と鼓舞」の物語の行方－「龍谷大学社会学部紀要」第29号　龍谷大学社会学部学会

(7) その具体的なデータと視点の素描は，以下の拙稿にて先鞭が付けられている。山本哲司　2000　経験としてのライフヒストリー－「語り」の相互作用と自己　亀山佳明・麻生武・矢野智司（編）『野生の教育をめざして－子どもの社会化から超社会化へ』新曜社　244–264頁

文　献

桜井厚　2007「部落の」語りがたさ／聞きがたさ－マイノリティ・インタビューの困難性－『研究紀要　解放研究しが』第17号

桜井厚　2005『境界文化のライフストーリー』せりか書房

御厨貴（編）　2007『オーラル・ヒストリー入門』

岩波書店
D・ベルトー　小林多寿子（訳）　2003（1997）『ライフストーリー―エスノ社会学的パースペクティヴ』ミネルヴァ書房
K・プラマー　桜井厚（訳）　1998（1995）『セクシャル・ストーリーの時代―語りのポリティクス』新曜社